

ポライトネス理論からみた韓・中・日の 言語行動の相互評価

李吉鎔*

〈Abstract〉

Politeness Theory and Evaluation of Language Behavior in Korean, Chinese and Japanese

This research applies the Politeness Theory to an analysis of how Korean, Chinese and Japanese evaluate the degree of face threatening in request, account and refusal speech acts in all three languages. Results showed that the degree of face threatening increases in the following order: request → account → refusal.

The analysis of data drew the following conclusions. (1) Korean, Chinese and Japanese subjects highly evaluated request utterances in Japanese. Also, Japanese subjects considered refusal utterances in all three languages acceptable. (2) It was also observed that high evaluation of request utterances in Japanese is related to the use of Japanese politeness strategies (off record). However, in refusal utterances, positive politeness strategies used in Korean and Chinese languages were highly evaluated, especially when it concerned “being polite” and “consideration for the hearer”. (3) In situations where the risk of face threatening increases, as in the case of refusal utterances, explanation of the reasons are seen as an efficient strategy for communication. Overall results showed that subjects considered the Japanese communication style a model to perform request speech acts. On the other hand, in the case of refusal and account utterances, Korean and Chinese styles were considered a communication model to be followed.

From the results shown above, we conclude that Japanese speakers are more likely to choose linguistic forms according to social restrictions and that their language behavior is based on “wakimae” (discernment). As for Koreans and Chinese, speakers often build their social relations using positive politeness according to each of the situations they face. We can say that language behavior in Korean and Chinese is based on “hatarakikake” (volition).

Field : Sociolinguistics

Keywords : Language behavior, Politeness, Face-risk, Mutual evaluation

1. はじめに

これまでの言語行動研究は、特に対照研究に焦点を絞れば、言語的行為がそれぞれの言語社会においてどのような姿をしているのかという実態記述と、なぜそのような姿をしているのかという要因分析を中心に成果を上げてきた(姜錫祐2007、洪珉杓2007、尾崎編2008、李吉鎔2009など)。このような取り組みによって、日本人や韓国人の言語行動の姿が明らかになりつつあるが、異文化間コミュニケーションにおける誤解や摩擦の解明のためには、言語行動についての「評価」研究が求められると考える(李吉鎔

* 中央大学校 アジア文化学部 副教授、社会言語学

2012)¹⁾。

言語行動に対する「評価」は、言語管理理論(language management theory)や異文化トレーニング(DIE法)などにおいて中枢的な位置を占める。たとえば、言語管理理論における「評価」は、留意された逸脱が問題となるのかならないのか、それによって、調整が行われるのか行われなかったのかを決定する重要な役割を持つという点において、言語管理プロセス(ネウストブニー1995)の中核をなす言語行動の評価についてこれまで、韓・中・日の3ヶ国語の「依頼-釈明-断り」という目的指向的な言語行動を対象に、個別に検討を行ってきた(李吉鎔2012、李吉鎔2015)。分析の結果、暫定的ながら、次のような結論を得ることができた。

- (a)依頼発話に関しては、自国語の「丁寧」と「目的指向的」項目を相対的に高く評価するといった一貫した特徴が観察された。そして、日本人における自国語の依頼発話に関する評価の高さが注目され、発話の意図を明確に示すこと以上に重視される丁寧さと相手配慮といった日本人の依頼発話の定型的な形態が存在することが浮き彫りになった(李吉鎔2012)。
- (b)相手のフェイスを脅かすリスクの高い断り発話では、韓国語や中国語のように、細かく理由を説明することが有効であり(日本人にも高く評価される)、具体的な理由を言わないような日本語については、評価が低い。なお、日本人は3ヶ国語の典型的な発話様式(ステレオタイプ)の全部に寛容である(李吉鎔2015)。
- (c)釈明発話において特徴的なのは、「相手配慮」項目が、全体的に低い評価を受けることである。相手の注意や叱責などに対して、自己防衛的な言い訳をするといった釈明発話自体の抱えている問題であると考えられる(李吉鎔2015)。

しかし、依頼-釈明-断りという3つの言語行動を比較的に捉えると、個々の言語行動を見ているだけでは把握しきれない現象が観察された。すなわち、(1)自国語の断り発話では評価が高いのに対して、釈明発話では相対的に低くなっているという差が存在する点、(2)韓国語や中国語の場合は、「依頼-釈明-断り」について、自国人と相手国人とが近似した評価を下しているのに対して、日本語については自国人と相手国人とで全く異なる評価を下している点、などである。

こうした問題について、本研究では、ポライトネス理論(politeness theory)を導入し、「依頼-釈明-断り」というFTA(Face Threatening Act、フェイス侵害行為)のフェイス・リスク(フェイス侵害の可能性)の度合いによるものとして解釈を試みる。以下、ポライトネス理論を簡略に紹介し、依頼-釈明-断り発話が持ち合わせているフェイス・リスクの度合いについて検討する。

1) 筆者は言語行動についての「評価」研究が重要であると考え、評価研究分野を開拓してきた(李吉鎔2011など)。これまで、韓・中・日の3ヶ国語の「依頼-釈明-断り」という目的指向的な言語行動に注目し、一部に「直接的発話、間接的発話」という表現形式の側面も関わるが、「状況の説明、同意書の必要性、謝罪表現の有無」といった発話内容面を対象に相互評価を実施し、それぞれどのような評価が行われており(実態記述)、それはどのような要因によるものか、といった要因究明を試みてきた。

2. ポライトネス理論とフェイス・リスクの度合い

Brown and Levinson(1987)のポライトネス理論は、社会的な人間関係の中で、円滑なコミュニケーションや人間関係を維持するために、人々はどのような言語的なストラテジーを用いるのかについてのものである。言語行動の観点から言うと、ポライトネスとは、会話の場において表現・伝達される、自身や相手のフェイスを侵害することに対する軽減的・補償的な言語的配慮のことである(滝浦2008)。

ポライトネス理論で中核を成す概念は、「フェイス侵害」である。人間には、他人に理解されたり認められたいというポジティブ・フェイス(positive face)と、他人に邪魔されたくないというネガティブ・フェイス(negative face)の2つのフェイスを保ちたいという欲求がある。Brown and Levinsonは、この2つのフェイスを脅かさないように配慮することがポライトネスであると定義した。このフェイスのどちらか一方、あるいは両方を脅かすような行為をフェイス侵害行為(FTA)と呼ぶ。FTAは、話し手と聞き手の社会的距離と、話し手と聞き手の力関係と、相手にかける負担の度合いの合計で表され、負担の度合いは文化によって異なるとされる。Brown and Levinsonによるフェイス・リスクの見積もりの公式は、次のようになる。

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

W_x (weightiness) : ある行為 x の相手に対するフェイス・リスク

D (distance) : 話し手(speaker)と聞き手(hearer)の社会的距離

P (power) : 聞き手(hearer)の話し手(speaker)に対する力

R_x (ranking of imposition) : 特定の文化内における行為 x の負荷度

ほとんどすべての言語的行為は潜在的なフェイス・リスクを持ち、フェイス・リスクの見積もりに応じて、ポライトネスを表現・伝達する具体的な手段が5つのストラテジー(strategy)として具現される。これら5つのストラテジーの両端に位置するのが配慮度ゼロである「直接表現(直言)」と、「行為回避」である。一方の極では「配慮をしない(直言)」こと、他方の極は「行為をしない」ことで、対人配慮と意図伝達のどちらかを「しない」点で共通している。

両極の間に、フェイス・リスクの見積もりによって、ポジティブ・ポライトネスのストラテジーとネガティブ・ポライトネスのストラテジー、そしてオフ・レコード(ほのめかし)のストラテジーがある。

それぞれに相手や自身のポジティブ・フェイスを配慮する(働きかけ)ポジティブ・ポライトネスのストラテジーは、共感のポライトネス、または連帯のポライトネスと言い換えることもできるが、典型的な表現のタイプとしては、相手をほめる、一致や共感できる点を見いだす、申し出や約束をすることで行為の共同性に訴える、といったものがある。一方、ネガティブ・フェイスを配慮する(わきまえ)ネガティブ・ポライトネスのストラテジーは、回避のストラテジーと言い換えることができるが、依頼などの言語的行為を間接的に表現すること、事態を相対化する間接話法、自分と相手の関係を明確化しないことなどは、典型的なネガティブ・ポライトネス・ストラテジーである。また、オフ・レコード(ほのめかし)は、事柄を明示的に伝達することよりも、相手と自分のフェイス侵害を避けることを優先して、用件への直接的な言及を回避するストラテジーである。皮肉や比喩、修辭疑問文や同語反復(tautology)などが用いられる。

ここで依頼-釈明-断りの言語行動について検討する。

まず、依頼(request)は将来の相手の行動の自由を一部制限するので、相手のネガティブ・フェイスを侵害するものである。釈明(account)は、望ましくない不適切な行為が生じた場合の自己イメージの回復を目的とした方略である。したがって、釈明は理屈っぽいという評価を受けることがしばしばある。

そして依頼側の依頼を断ることにより、依頼側のポジティブ・フェイスをつぶしかねない断り(refusal)発話は、相手の意向に添えない旨の発言である。断ることによって生じる相手の不快な思いを最小限にするために何らかの配慮を施す。従来の研究では、異文化間のコミュニケーションスタイルの相違により重大な誤解を引き起こす恐れのある言語行動であるとみなされてきた(任榮哲2006など)。

本研究における依頼-釈明-断りの言語行動がそれぞれ持ち合わせているフェイス・リスクの度合いについて検討すると、「依頼→釈明→断り」の順に相手のフェイスを脅かす度合いが強くなると考えられる。大学で指導教授に推薦書および同意書を依頼することは、学生として当然要求可能な行為であるとみなされる。すなわち、フェイス・リスクの度合いという観点からは、3つの言語行動の中で最も低いと考えられる。また、指導教授に推薦書および同意書を受諾してもらった後に、指導教授からの依頼を断ることになるので、断りはフェイス・リスクの度合いが相当高いものと考えられる。本研究では、依頼-釈明-断り発話のそれぞれが持ち合わせているフェイス・リスクの度合いの「絶対値」を見積もるための装置は用意されていないが、依頼-釈明-断り発話の間の相対的なフェイス・リスクの度合いを比較的に捉えることにする。

3. 調査の概要

3.1 調査について

本研究の資料の収集は、次の3種類の調査によって行われた(詳細は李吉鎔2011を参照されたい)。

- (a)言語行動の実態把握のためのロールプレイ調査：2009年4月～2009年10月、韓国・中国・日本で93名を対象に行った。
- (b)言語行動のモデル設定のためのアンケート調査：2009年5月～12月、韓国・中国・日本で1210サンプルを収集した。
- (c)言語行動についての相互評価調査：2009年12月～2010年5月、韓国・中国・日本で936サンプルを収集。

本研究の分析対象となる(c)の「言語行動に対する相互評価」調査は、次のような方法によって行われた。

まず、ロールプレイ調査の結果およびアンケート調査の結果を観察し、韓・中・日の3ヶ国語の「依頼」「(不満表明に対する)釈明」「断り」の言語行動の特徴的な内容面のパーツを取り出し、再構成することで、3ヶ国語のそれぞれのステレオタイプに最も近いと考えられる発話を選定する²⁾。

次に、韓・中・日の3ヶ国語の言語行動のステレオタイプを各国語に訳する。その際、内容面に注目し、文

2) この発話は、ロールプレイ調査から得られた生の資料の寄せ集めであり、発話内容に注目するため、言い淀みやフィラーなどを除いた簡潔な形になっている。各言語のステレオタイプとして挙げられた発話のパーツについては、たとえば金順任(2013:246)などの結果からも裏付けられている(金順任2013の図4などを参照されたい)。

体は次のように統一する。すなわち、日本語は「です・ます体」、韓国語は「합쇼체」のとおりである。

そして、3ヶ国語の言語行動のステレオタイプに対する評価項目を、先達の成果を参照し、「丁寧」「具体的」「論理的」「相手配慮的」「目的指向的」の5つに設定する³⁾。5つの評価項目について、「全く違う」「少し違う」「少しそうだ」「とてもそうだ」の義務的な4段階の評価をしてもらう。

3.2 相互評価調査の実施概要

相互評価に関する調査は、それぞれソウル、北京、東京で行われ、計936サンプルが収集された。調査の時期および地域、協力者の人数などの詳細を表1に示す。また表2は、有効回答の詳細を示したものである⁴⁾。

〈表1〉 調査の概要

	調査の時期	地域/大学	調査協力者
韓国	2009年12月	ソウル/中央大学校	大学生・大学院生314人
中国	2009年12月	北京 /北京外国語大学	大学生・大学院生323人
日本	2009年12月	東京 /東京大学・	大学生・大学院生299人
	2010年5月	早稲田大学	

〈表2〉 有効回答の詳細

	全体	平均年齢	(男	女	無回答)
韓国	307(全回答の97.8%)	21.5才	(144	163	-)
中国	322(全回答の99.7%)	19.3才	(90	203	29)
日本	293(全回答の98.0%)	20.5才	(116	176	1)
計	922	20.4才	(350	542	30)

3.3 各発話のステレオタイプ

3.3.1 依頼－釈明－断りの状況

依頼－釈明－断りの状況は次のように構成されている。

- 依頼：学生は、アメリカの大学の訪問プログラムに参加するため、指導教授に同意書と推薦書を依頼する。
- 釈明：上の依頼に対し、指導教授は締め切りが迫った状況での依頼に不満を示す。学生はそれに対して釈明を行う。
- 断り：指導教授に同意書および推薦書を依頼し、その作成を承諾してもらった後、指導教授に次の

- 3) 先達の成果については、李恩美(2008)、李吉鎔(2009)、박양순(2009)、洪珉杓(2012)、姜錫祐(2014)、정영미(2014)などを参照されたい。また、これらの項目の具体的な姿については、박양순(朴良順2011:58-59)を参照されたい。そのうちの「丁寧」項目については、李吉鎔(2012:166-67)でも詳細に検討した。「丁寧」項目は、語形式から表現形式、さらに発話内容のレベルに至る重層的な意味を持っており、韓国人・中国人と日本人とは「丁寧」の意味するところが異なりうる事がうかがわれた。
- 4) 一つの問いに重複して答えた場合や回答してくれなかった場合を無効回答と処理した。また、すべての評価項目に同一評価を行ったもの(韓国で7件、中国で1件、日本で6件)も無効回答として除いている。

日の留学生歓迎会での案内係りを頼まれる。しかし、学生はそれを断らなければならない状況だったので、断りの意を示す。

指導教授の誘導文は次の通りである。紙幅の都合上、日本語のみを提示する。

- (1)依頼：今日、来ると言ってたよね？で、用件は何かな。
- (2)釈明：明日が締め切りだと？困ったな…だったらもっと早くもって来ないと…
- (3)断り：明日、留学生歓迎会があるんだけど、もし時間があったら案内係りをお願いできるかな。

以下は、各国語のステレオタイプである。韓国語と日本語は原語のみ、中国語に関しては原語と日本語訳を付す。

3.3.2 韓国語の依頼－釈明－断り発話

- (a)依頼発話：안녕하세요 교수님. 다름이 아니라 제가 취업에 도움이 되는 미국 탐방 프로그램에 지원했습니다. 정말 유익한 프로그램이라 좋은 경험이 될 것 같습니다. 바쁘신 데 죄송합니다만 교수님의 동의서가 꼭 필요해서 부탁 드리러 왔습니다.
- (b)釈明発話：죄송합니다 교수님. 제가 생각이 짧아서 미리 말씀 드리지 못했습니다. 그래도 제가 이번에 꼭 필요해서요. 작성해 주신다면 이 은혜 잊지 않겠습니다. 꼭 좀 부탁 드리겠습니다.
- (c)断り発話：정말 죄송합니다. 정말 도와 드리고 싶은데 개인적으로 어머니께서 건강이 안 좋으셔서 병원에 입원해 계십니다. 시간이 되는 대로 조금 늦게라도 와서 도와 드리겠습니다.

3.3.3 中国語の依頼－釈明－断り発話⁵⁾

- (a)依頼発話：您好，教授。最近有一项美国探访活动，主办方要求必须提交教授的同意书。能不能请教授帮我写一下同意书？
(日本語訳：こんにちは、先生。実は、アメリカの大学の訪問プログラムがあるのですが、主催者側から必ず、先生の同意書を提出するよう言われています。私に同意書を書いてくださることはできますか。)
- (b)釈明発話：对不起，教授。我怕给教授添麻烦所以一直托到现在才来。要不我写好草稿给您，您只要稍微修改一下就行。还望您帮忙。
(日本語訳：先生、申し訳ございません。先生にご迷惑をかけることになると思ったので、こんなに遅くなってしまいました。私が初案を作成しますので、それを基に少し書き直していただければよいのですが、先生のお力添えをお願いします。)
- (c)断り発話：真对不起。明天下午有个重要的考试，恐怕不行。我有个朋友在这方面经验比较多，我把

5) 中国語の表現について、審査委員から不備があるのでは、という指摘をいただいた。中国語の表現は、ロールプレイ調査において中国語話者が実際に使用した生の資料なのである。不備があるとすれば、中国語を母語とする日本語研究者に中国語を日本語に翻訳してもらったものにある。この中国語の表現および日本語訳は、研究調査の段階から使用してきたものなので、本研究で任意に変えるわけにはいかないが、今後良質の資料の確保には最善の注意を払いたい。

他介绍给您如何？

(日本語訳：本当に申し訳ございません。明日の午後は大事な試験がありますので、できないと思います。でも、こういうことに詳しい友達が一人いるので、その友達を紹介することもできますが、いかがでしょうか。)

3.3.4 日本語の依頼－釈明－断り発話

- (a)依頼発話：お忙しいところ申し訳ございませんが、実は、大学生を対象としたアメリカの大学の訪問ができるプログラムがあり、参加してみたいと思うのですが、もしよろしければ、先生に同意書をお願いできないでしょうか。
- (b)釈明発話：申し訳ございません。このプログラムを知ったのがついこの間だったので、お手数をおかけしますが、どうかよろしくお願いします。
- (c)断り発話：本当に申し訳ございません。明日は、前々から約束がありましてできません。またこのような機会がありましたら、ぜひお手伝いさせていただきます。

日本語のステレオタイプの特徴としては、呼称語の不使用や、具体的な内容のない慣例的な理由が挙げられており、相手の都合をうかがう表現が多いことである。前述したフェイス・リスクの見積もりによれば、日本語は、概して事柄を明示的に伝達することよりも、用件への直接的な言及を回避するストラテジーである「オフ・レコード(ほのめかし)」を中心に(日高2012)、相手との距離を取るネガティブ・ポライトネス・ストラテジーが使用されている。

一方、韓国語や中国語は、共感のポライトネス、連帯のポライトネスとも言える、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーによって構成されているとみてよい⁶⁾。中国語は、相手に明確に言及する呼称語や、相手(先生)に対する配慮の末に遅くなったという弁解と、初案を書いてくるという代案提示の具体性が注目を引く。また公的な理由説明として重要な試験があることが提示されているだけでなく、さらに経験豊富な友人を紹介することを代案として示すなど、相手との関係を強く持とうとする。韓国語は、呼称語の他に、就職のための経験という同意書および推薦書の必要性、先生の恩を忘れないという発話、私的な理由説明として、家庭の事情が具体的に述べられている。依頼内容の遂行が難しくても何とか頑張りたいという「約束」が述べられている点などは、相手との連帯を支持するものである。なお、中国語や韓国語に謝罪表現も含まれているが、これについては、相手との間に距離を置きたいという表現意図(つまり、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー)というよりも、目上の先生に対するわきまえ的(規範的)使用とみるべきであろう。

4. 分析結果

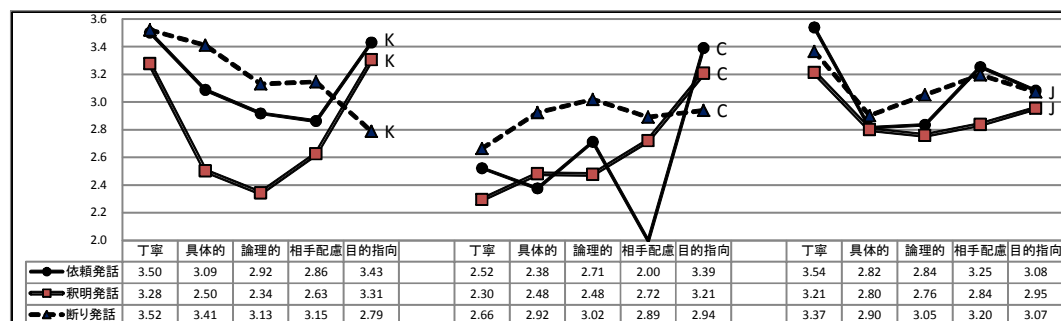
以下、本節では、韓・中・日の依頼－釈明－断り発話に対する、3ヶ国人の相互評価を分析する。まず

6) 中国語と韓国語とを同一に扱えるのかという問題もあるが、滝浦(2008:97-121)には中国語と韓国語の発話行為の類似性が詳細に示されている。

は、自国語についての評価をまとめ、続いて相手国語についての評価を見ていく。

4.1 依頼－釈明－断り発話に関する自国人の評価

図1は、それぞれ自国語に対する自国人の評価を示したものである。表の中の下段の「依頼発話」の「丁寧」に3.50とあるのは、4段階の評価の平均値である。また、表中のKは韓国人の評価、Cは中国人の評価、Jは日本人の評価を意味する(以下、同様)。



〈図1〉 自国人の自国語についての評価

図1のそれぞれの自国人の評価を示した結果を見ると、次のようなことが言える。

(1)韓国人は、3つの発話に対する評価が分散している(最大0.91、断り－釈明間の「具体的」項目)。「丁寧」項目および「目的指向的」項目への評価が高い。断り発話の「目的指向的」項目については、「시간이 되는 대로 조금 늦게라도 와서 도와 드리겠습니다(遅くても駆けつけてお手伝いします)」という発話内容により、断りとしての機能に対する評価が低くなったと考えられる。

(2)中国人は、3つの発話に対する評価が全体的に低い(「目的指向的」項目以外はほとんど3を下回る)。中でも「丁寧」項目の評価が低く、依頼の「相手配慮的」項目はとくに低いが、「目的指向的」項目の評価は高い。なお、中国語の依頼発話の評価が低いことは、依頼の理由として、「主办方要求必须提交教授的同意书(主催者側から必ず、先生の同意書を提出するよう言われています)」のように、主催者側の要求を挙げている点が影響していると思われる。

(3)日本人は、3つの発話の対して、比較的一貫した評価を下している(最大差は依頼－釈明間の「相手配慮的」項目で0.41しかない)。「丁寧」項目、「相手配慮」項目が相対的に高い評価を得ている。ただし、釈明は、相手配慮的項目よりも目的指向的項目の評価が高い。

(4)言語行動に注目すると、3ヶ国語において、最も目的指向的な言語行動は「依頼」である。学生の自由意思により指導教授に推薦書および同意書を依頼するわけだからいわば当然の結果であろう。依頼は、フェイス・リスクの度合いが、3つの言語行動の中では最も低いと考えられることと関連する。

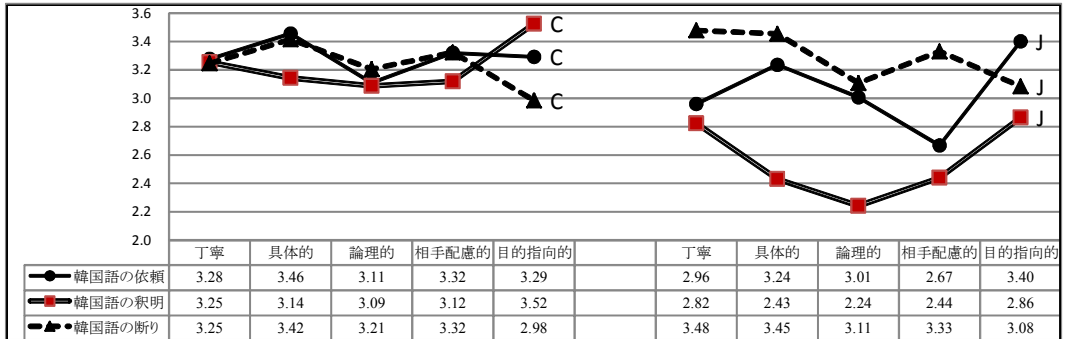
(5)なお、3ヶ国語ともに、「断り」と「依頼」が高い評価を受け、「釈明」は相対的に低く評価されている。そもそも「釈明」とは、望ましくない不適切な行為などについて、自己イメージの回復を目的として相手に了解を求める行為である。必然的に自己弁明的になることによると考えられる。

こうした自国人の評価と比較しつつ、以下では依頼－釈明－断り発話に対する相手国人の評価を見て

いく。

4.2 韓国語に対する中国人と日本人の評価

まず、図2に、韓国語の言語行動に対する中国人の評価(左)と日本人の評価(右)をまとめた。



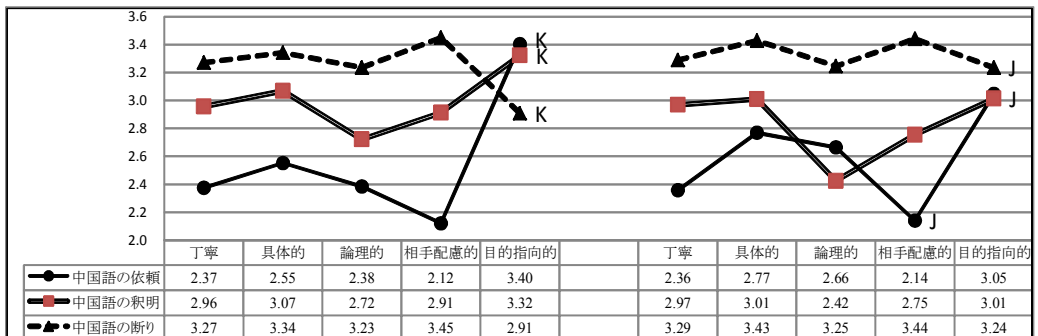
〈図2〉 韓国語の言語行動に対する中国人の評価(左)と日本人の評価(右)

(1)韓国語の言語行動に対する中国人の評価は全体的に非常に高く、日本人の評価は、断り発話で非常に高い。但し、両方とも断り発話(図の中の点線)の「目的指向的」項目は低いが、前述したように、「遅くても駆けつけてお手伝いする」という発話内容が影響していると思われる。

(2)韓国語の釈明発話の評価が日本人に低いことについては、韓国語の釈明発話が自分の行為の否定的意味合いを弱めようとし、正当化するものと捉えられた可能性がある。日本では一般に、言い訳をしないのが美德であり、「言い訳(本研究の釈明)」は自己弁護や自己防衛の表出であり、避けるべき行為として否定的に評価されてきたこと(李舜炯他2015)と関係しよう。

4.3 中国語に対する韓国人と日本人の評価

次の図3に、中国語の言語行動に対する韓国人の評価(左)と日本人の評価(右)をまとめたものである。



〈図3〉 中国語の言語行動に対する韓国人の評価(左)と日本人の評価(右)

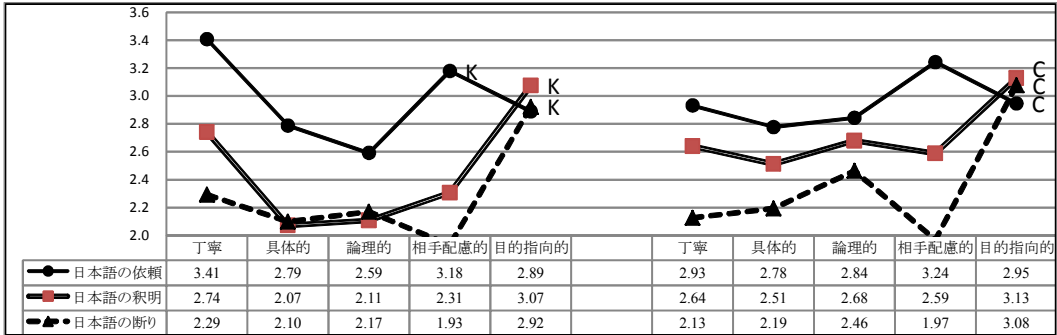
(1)韓国人と日本人の評価が近似したパターンを示す。断り発話に関する評価は断トツに高い。その次に、釈明発話の評価もおおむね高い。全体的に丁寧項目は低く、目的指向性は高い評価を得ている。

(2)個別の言語行動に注目すると、依頼発話は、目的指向性は高いが、特に丁寧項目や相手配慮項目は低い評価をしている。断り発話および釈明発話の評価は、自国人の評価と比べると高くなっている。なお、3つの発話の「目的指向性」は差が小さい。

(3)[謝罪-弁解-代案提示-希望型依頼]によって構成される中国語の釈明発話(3.3.3(b)参照)については、韓国人と日本人において、初案を書いてくるという代案提示の具体性が高く評価されている。また、「相手配慮的」項目への評価が3ヶ国人に比較的に評価が揃っている(韓国人2.91、中国人2.72、日本人2.75)ことは、相手(先生)に対する配慮の末に遅くなったという発話内容によるものと考えられる。

4.4 日本語に対する韓国人と中国人の評価

最後に、日本語の言語行動に対する韓国人の評価(左)と中国人の評価(右)を見よう(図4)。



〈図4〉日本語の言語行動に対する韓国人の評価(左)と中国人の評価(右)

(1)全般的に韓国人と中国人の評価が非常に類似したパターンを示している。依頼発話についての評価も近似している。ただし、「丁寧」項目については韓国人の評価が極めて高い。釈明発話に関しては、韓国人は低い評価を下し、中国人は中ほどの評価をしている。断り発話については非常に低い評価を下している。その中でも「相手配慮的」項目の評価が低い。

(2)なお、依頼発話に関しては、相手国人の評価と自国人の評価(図1参照)がともに高い。

5. 考察

前節では、依頼-釈明-断り発話に関する自国人の評価と、相手国人の評価にわけてみてきた。本節では、3ヶ国語の、特徴的な傾向について比較的に見ていく。まず、次の表は、人間関係の調整に配慮した対人関係調整機能をもつ「丁寧」項目と「相手配慮的」項目について、3.0以上の高評価を「+」とし、中評価(2.5~2.9)を「0」、2.5未満の低評価は「-」記号で表したものである。表中の「+-」において左の記号は「丁寧」項目、右の記号は「相手配慮的」項目についての評価である(以下同様)。

〈表3〉 対人関係調整機能に関する相互評価(丁寧・相手配慮)

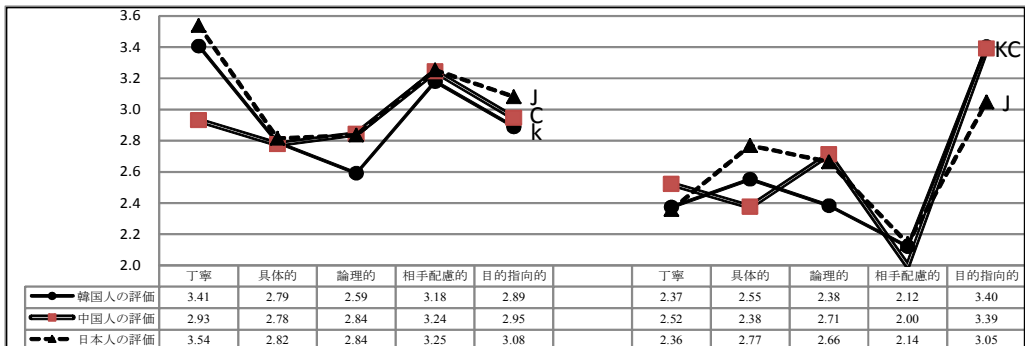
依頼 発話	韓国語			中国語			日本語		
	韓国人の評価			中国人の評価			日本人の評価		
	+	o		-	-		+	+	
	+	+		o	-		o	+	
解 明 発話	韓国語			中国語			日本語		
	韓国人の評価			中国人の評価			日本人の評価		
	+	o		o	o		o	-	
	+	+		-	o		o	o	
断 り 発話	韓国語			中国語			日本語		
	韓国人の評価			中国人の評価			日本人の評価		
	+	+		+	+		-	-	
	+	+		o	o		-	-	
断 り 発話	韓国語			中国語			日本語		
	韓国人の評価			中国人の評価			日本人の評価		
	+	+		+	+		+	+	
	+	+		+	+		+	+	

この表からは、(a)日本語の依頼発話に対する3ヶ国人の評価の高さ、(b)韓国語の断り発話に対する評価の高さ、(c)日本人の3ヶ国語の断り発話に対する寛容さ、などが見てとれる。以下では、これらの特徴的な傾向について考察を行っていく。

5.1 低フェイス・リスクに好まれる日本人の言語行動(依頼発話)

まず、日本語の依頼発話に対する3ヶ国人の評価の高さからは、低フェイス・リスクに好まれる日本人の言語行動が想定できよう。前述したように、依頼発話は相手の行動の自由を一部制限するので相手のネガティブ・フェイスを侵害するものであるが、大学において指導教授に推薦書および同意書を依頼することは、学生としていわば当然要求可能な行為とみなされるため、フェイス・リスクの度合いは相対的に低いと考えられる。

次の図5に、日本語の依頼発話とともに、比較材料として中国語の依頼発話を示す。



〈図5〉 日本語の依頼発話(左)と中国語の依頼発話(右)に対する評価

日本語の依頼発話は、具体的なプログラムの内容や同意書の内容などに触れることなく、謝罪表現や

条件表現、否定疑問文といった間接的な表現を用いているが(3.3.4(a)参照)、それが韓国人と中国人に「相手配慮的」と評価されている(日本人も高い評価をしている)。また中国人に若干低くなっているが、韓国人と日本人は「丁寧」項目についても高く評価している。

一方、中国語の依頼発話は、韓国人と日本人に「目的指向的」項目を高く評価される一方で、「丁寧」項目と「対人配慮的」項目は低く評価されている。3ヶ国人に共通して低く評価されている「丁寧」項目と「相手配慮的」項目については、同意書の必要性を主催者側に責任転嫁するような印象を受けたためと考えられる。一方で、このやや強引な「同意書の必要性」は、「目的指向的」項目の評価の高さにつながると考えられる。

なお、表現・伝達の過程およびその内容の調整に関わりを持つ伝達過程調整機能を有する「具体的」、「論理的」項目についての相互評価をまとめると、表4のようなになる。ここでも3.0以上の高評価を「+」とし、中評価(2.5-2.9)を「0」、2.5未満の低評価は「-」記号で表す。

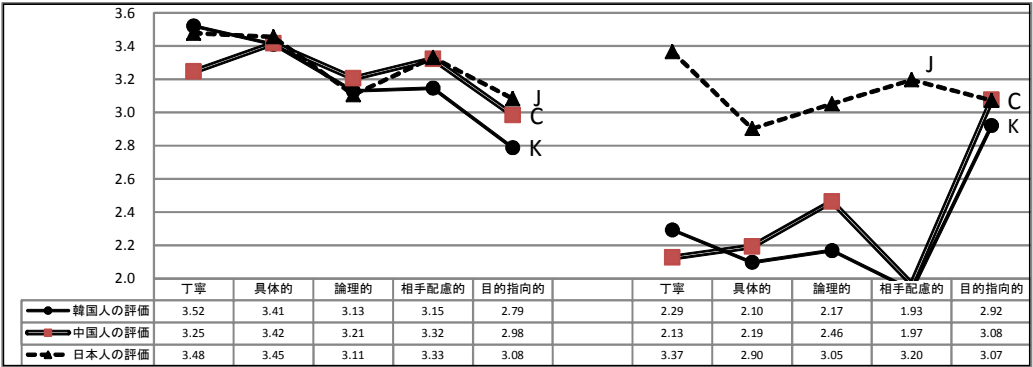
〈表4〉依頼発話に対する相互評価(具体性・論理性)

	韓国語	中国語	日本語
韓国人の評価	+ 0	0 -	0 0
中国人の評価	+ +	- 0	0 -
日本人の評価	+ +	0 0	0 0

表4からは、日本語の「具体的」、「論理的」項目についての評価は決して高くはないことがわかる。このことから、日本語の依頼発話の具体的な姿は、発話の意図を明確に示すということ以上に丁寧さと対人配慮が重視されるものと言えよう。そしてフェイス侵害の可能性が低い時は、日本人の言語行動のように、間接的で察し合いの配慮的言語行動が好まれると考えられるのである。

5.2 高フェイス・リスクに有効な韓国人の言語行動(断り発話)

次は、韓国語の断り発話に対する評価の高さを、高フェイス・リスクに好まれる言語行動として確認していく。図6は、韓国語の断り発話と、比較材料の日本語の断り発話を示したものである。



〈図6〉韓国語の断り発話(左)と日本語の断り発話(右)に対する評価

図6を見ると、まず注目に値するのは、韓国語の断り発話に対する3ヶ国人の評価の高さ(図左)および日本人における自国語の断り発話に関する評価の高さ(図右の点線)である。韓国語の断り発話のステレオタイプは、「謝罪 - 臨時的受容 - 理由説明 - 約束」によって構成されている(3.3.2(c)参照)。「정말 도와드리고 싶다」という臨時的受容や、「私的な理由の説明」として、「어머니가 건강이 안 좋아서 병원에 입원해 계신다」という家庭の事情が具体的に述べられていること、さらに依頼内容の遂行が難しくても何とか遂行したい(시간이 되는 대로 조금 늦게라도 와서 도와 드리겠다)という「約束」が述べられている。こうした韓国語の断り発話については、自国人の評価および相手国人の評価はともに高い。

日本語の断り発話については、自国人の評価は高いが、「前々から約束があった」、「今度はぜひお手伝いする」といった発話内容であり、こうした具体性がなく、内容への直接的な言及がないこと(オフ・レコード)が「丁寧」項目と「相手配慮」項目での高い評価につながっていると考えられる。しかし、中国人と韓国人の評価は極めて低い。こうした日本人のコミュニケーション・スタイルは中国人や韓国人との円滑なコミュニケーションの道具として不適切であると判断される⁷⁾。

なお、ここでも、「具体的」、「論理的」項目についての相互評価を見ておこう(表5)。

〈表5〉断り発話に対する相互評価(具体性・論理性)

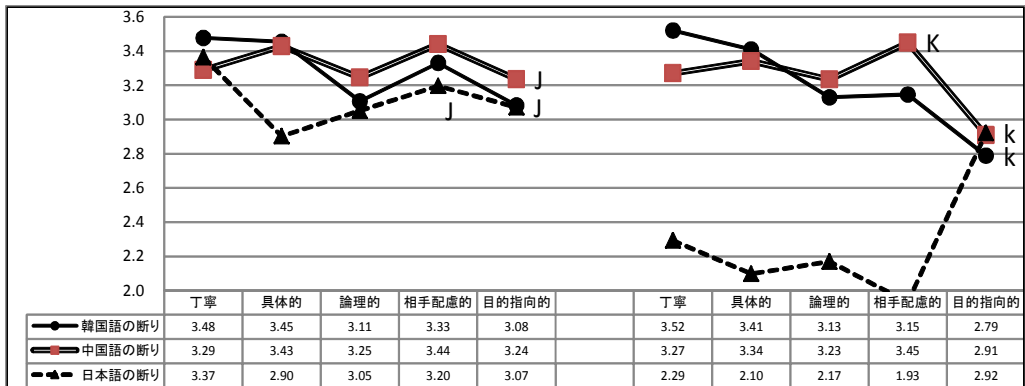
	韓国語	中国語	日本語
韓国人の評価	++	++	--
中国人の評価	++	o+	--
日本人の評価	++	++	o+

表5は、韓国語については、3ヶ国人がともに具体的であり、かつ論理的であると認識していることを示している。以上から、フェイス侵害の可能性が高い場合は、日本語の「察し合い」の配慮的言語行動(オフ・レコード)よりも、韓国語や中国語のように、ポジティブ・ボライトネス・ストラテジー(positive politeness strategies)を積極的に用いて、相手との距離を縮めようとする言語行動が好まれると考えられる。

5.3 高フェイス・リスクに対する日本人の寛容さ

最後に、フェイス・リスクの最も高い断り発話について、日本人の評価を韓国人の評価と比較しつつ見ておこう(図7)。図7は、図5や図6と異なって、日本人による3ヶ国語の評価(左)と、韓国人による3ヶ国語の評価(右)となっていることに注意されたい。

7) 日本語の断りにおけるあいまい性について、言い訳の使用に焦点を当てた断り指導の実践報告である吉田(2010:3-4)では、「その日は都合が悪い」、「用事があるから」などといった言い訳のみを述べて相手に断りを察してもらうスタイルは、日本語以外の言語環境においてはそれが断りだと認識されず、断りの意図が理解されにくいという問題が起ってくる可能性がある」と指摘されている。これまで断り発話は、異文化間コミュニケーション・スタイルの相違により、重大な誤解を引き起こす恐れのある言語行動であると予想されてきた。しかし、本研究の結果はこうした予想を覆すものである。つまり、断り発話のように、相手のフェイスを脅かすリスクの高い言語行動では、中国語や韓国語のように、誰とどこで何をするかという具体的な内容を提示することが円滑なコミュニケーションに有効であると思われる。用件への直接的な言及のない日本人の言語行動は否定的な評価を受け、もし誤解や摩擦が生じるのであれば、日本人のあいまいな言語行動に原因があると考えられるのである。



〈図7〉 各国語の断り発話に対する日本人の評価(左)と韓国人の評価(右)

日本人は、韓国語の断り発話も中国語の断り発話も高く評価している。また韓国語や中国語よりは若干低くなるが、日本語の断り発話についても高く評価している。(「具体的」項目のみが3.0を下回るが、「丁寧」項目は中国語より高く、「目的指向的」項目は韓国語とほぼ同等の高さである。)つまり、日本人には3ヶ国人の断り発話がすべて受容されているということになる。

このことから次の2点がわかる。すなわち、基本的に、日本人は典型的なコミュニケーションのスタイルをもっており、それは、相手の心理状態や知識状態を察すること、同時に、相手に自分の心理状態、知識状態を察してもらえ「察し合い」の配慮的言語行動である(日高2012)こと、そして、フェイス侵害の可能性が高くなれば、韓国語や中国語⁸⁾のように、細かく理由を説明することも許容される(むしろ高い評価をしている)ということである。

6. まとめと今後の課題

以上、本研究では、韓・中・日の3ヶ国人の「依頼-釈明-断り」という目的指向的な言語行動の評価について、相互に比較しつつ検討してきた。ポライトネス理論を導入し、「依頼-釈明-断り」という言語行動自体が持ち合わせているFTAのフェイス侵害の可能性の度合いによるものとして解釈を試みた。

その結果、次のようなことが明らかになった。

- (1) 日本語の依頼発話に対する3ヶ国人の評価は高く、韓国語の断り発話に対する3ヶ国人の評価も高い。そして日本人は3ヶ国語の断り発話のすべてに対して寛容的である。
- (2) 「依頼→釈明→断り」発話の順にフェイス・リスクの度合いが高くなる。フェイス・リスクの低い依頼発話は、日本語のように、ポライトネス・ストラテジーを使用しなくてもかまわないが、フェイス・リスクの高い断り発話では、中国語や韓国語のように積極的にポライトネス・ストラテジーを使

8) 日本語と中国語の断り発話を対照分析した劉珏・肖志(2008)は、中国語の具体的な理由を述べることは客観的な事実に基づいて情報を提供しているため、より説得力のある断りストラテジーであると述べている。また、断る側は客観的な事実を理由にすることによって、断りによるFTAを緩めることができると主張している。

用することが「丁寧」項目や「相手配慮」項目の評価の高さにつながる。

- (3) 韓国人と中国人、そして日本人が円滑なコミュニケーションを行うに際し、ポライトネス理論の観点からすると、相手のフェイスを脅かすリスクの高い言語行動の「断り」では、韓国語や中国語のように、細かく理由を説明することが有効であると思われる。誤解を恐れずに言えば、日常生活の言語行動では、日本語のコミュニケーション・スタイルがモデルになり、高度に目的指向的な言語行動では、韓国語や中国語のコミュニケーション・スタイルが円滑なコミュニケーションの道具になると考えられる。

以上から、日本語は、社会的な制約条件に応じてすでに決まっている言語形式や発話内容を選択するという、いわば「わきまえ(規範的)」な配慮的言語行動であり、韓国語と中国語は「わきまえ」使用をわきまえつつ話し手がその場その場でポジティブに社会的関係を構築していくという、「働きかけ(戦略的)」言語行動であると言えよう。

なお、次のような点については、本研究では究明できなかった。

- (a) 中国語の依頼発話における「相手配慮」項目の評価が自国人にも相手国人にも低い。中国語の依頼発話の評価が低いのは、発話内容の問題か、あるいは言語表現の問題か。
- (b) 本研究では、資料提示の簡潔性を優先し、「韓国語の発話」などという用語を用いてきた。しかし、韓国語の発話の代表性について必ずしも一致した見解が得られたわけではない。したがって、より働きかけ性の発話、よりわきまえ的な発話、などといった機能的な用語が適切かもしれない。
- (c) また、本研究では、依頼・釈明・断り発話自体が持ち合わせているフェイス・リスクの度合いについて比較的に検討したが、それぞれの発話のフェイス・リスクの度合いの、絶対値を見積もることはできなかった。したがって、依頼・釈明・断り発話の間の相対的なフェイス・リスク値を比較的に捉えたに過ぎない。

これらについてはさらなる検討が要る。すべて今後の課題となる。

【参考文献】

- 李恩美(2008)「日本語と韓国語における「丁寧度」を示すマーカーのない発話」の対照研究」『日本語学研究』第22輯 韓国日本語学会 pp.277-292
- 李吉鎔(2009)「韓国人と日本人の言語行動を左右する背景要因-心的距離の変化と表現形式の使い分けの様相-」『日本研究』第26輯 中央大学校日本研究所 pp.83-103
- _____(2011)「異文化間コミュニケーション研究のデザイン」『日本研究』第30輯 中央大学校日本研究所 pp.27-46
- _____(2012)「韓・中・日の3ヶ国の大学生の言語行動の相互評価に関する一考察」『日本研究』第32輯 中央大学校日本研究所 pp.151-172
- _____(2015)「韓・中・日の3ヶ国人の断り発話に対する相互評価」『日本研究』第39輯 中央大学校日本研究所 pp.75-95
- 李舜炯・渡辺真由子・馬雲(2015)「母語話者と非母語話者の「言い訳」比較-「なんか」と「ちょっと」に着目して-」『日本語教育研究』第31輯 pp.175-190

- 任榮哲(2006)「韓國人ととのコミュニケーション」真田真治監修『韓國人による日本社会言語学研究』おうふう pp.7-19
- 尾崎喜光編(2008)『対人行動の日韓対照研究：言語行動の根底にあるもの』ひつじ書房 pp.1-273
- 姜錫祐(2007)「韓國人と日本人のコミュニケーション行動に関する比較対照研究-依頼行動における依頼主の意識に注目して-」『日本語学研究』第19輯 韓国日本語学会 pp.13-29
- _____(2014)「의뢰행동의 한일대조연구」『日本語学研究』第42輯 韓国日本語学会 pp.3-19
- 金順任(2013)「日中韓の大学生の断り談話に関する一考察」『明海日本語』第18号 増刊 pp.239-250
- 滝浦真人(2008)『ポライトネス入門』研究社 pp.1-176
- 정영미(2014)「청유대화에서의 화제 선택과 폴라이트니스」『日本語学研究』第41輯 韓国日本語学会 pp.149-163
- 日高水穂(2012)「『察し合い』の談話展開に見られる日本語配慮言行動」三宅和子・野田尚史・生越直樹編『「配慮」はどのように示されるか』ひつじ書房 pp.91-112
- ネウストプニー, J. V. (1995)「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』7 大阪大学文学部日本語学部講座 pp.67-82
- 박양순(2009)「다문화사회의 이문화 커뮤니케이션 —한중일 이문화 커뮤니케이션을 중심으로—」『일본연구』제27집 중앙대학교 일본연구소 pp.67-86
- _____(2011)「한중일 간 커뮤니케이션에 있어서의 개인적 차원의 언어관리」『일본연구』31집 中央大学校日本研究所 pp.51-69
- 洪珉杓(2007)『日韓の言語文化の理解』風間書房 pp.1-346
- _____(2012)「교수에 대한 대학생 언어행동의 한일비교」『日本研究』第32輯 中央大学校日本研究所 pp.233-251
- 劉珏・肖志(2008)「断りの発話行為の伝達効果について：誘いに対する断りの理由を中心に」『福井工業大学研究紀要』38 福井工業大学 pp.127-132
- 吉田好美(2010)「言い訳を使用した断り指導の実践報告」WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』日本語教育学会(2010年12月)http://www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/2010Forum/2010P3_yoshida.pdf
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge, UK: Cambridge University Press:1-360

〈 요지 〉

공손이론으로 본 한·중·일 3국인의 언어행동 상호평가

본 연구는 한·중·일 3개국인의 의뢰-해명-거절이라는 목적지향적인 언어행동의 평가에 관한 것으로, 공손이론을 도입하여 체면(Face) 위협이라는 측면에서 고찰한 것이다. 본 연구의 분석대상인 언어행동은 '의뢰→해명→거절'의 순서로 상대방의 페이스 위협 정도가 강해진다. 이를 분석한 결과, 다음과 같은 점을 알 수 있었다.

(1)일본어의 의뢰발화에 대한 3개국인의 평가가 높고, 한국어의 거절발화에 대한 3개국인의 평가 또한 매우 높다. 또한 일본인의 경우, 3개국의 거절발화에 대해서는 관용적이다.

(2)의뢰발화는 일본어와 같이 공손전략을 사용하지 않아도 문제가 발생하지 않지만, 거절발화에서는 한국어나 중국어와 같이 적극적으로 공손전략을 사용함으로써 '정중'항목과 '상대배려적'항목의 평가의 상승으로 이어진다.

(3)한국인과 중국인, 그리고 일본인이 원활한 커뮤니케이션을 할 때에, 공손이론의 관점에서 보면, 상대의 페이스를 위협하는 위협이 높은 언어행동인 '거절'에서는 한국어나 중국의 경우처럼 상세하게 이유를 설명하는 것이 유효할 것으로 판단된다. 즉, 일상생활의 언어행동에서는 일본어의 커뮤니케이션 스타일이 모델이 될 수 있으며, 고도로 목적지향적인 언어행동에서는 한국어나 중국어의 커뮤니케이션 스타일이 원활한 의사소통의 도구가 될 것이다.

위의 결과는 일본어는 사회적인 제약 조건에 따라 이미 정해져 있는 언어형식과 발화내용을 선택한다는 이른바 규범적 언어행동이며, 한국어와 중국어는 규범적 사용도 보이지만, 화자가 당면한 자리에서 적극적으로 사회적 관계를 구축해 나가는 전략적 언어행동임을 나타내는 것으로 볼 수 있다.

논문분야 : 사회언어학

키 워 드 : 언어행동, 공손이론, 체면 위협, 상호평가

■ 이길용 (李吉鎔)

중앙대학교 인문대학 아시아문화학부, 부교수

ih_kilyong@cau.ac.kr

- 投 稿 日 : 2015년 9월 20일
- 審査開始 : 2015년 10월 4일
- 審査完了 : 2015년 10월 27일
- 掲載確定 : 2015년 11월 15일